

## 第162回 山形県社会教育委員の会議 議事録

日時：平成22年5月25日（火）13:30～15:30

場所：県庁1001会議室

### 3 座長選出

各委員からの了承のもと、舩田忠雄委員を座長に選出。

### 4 議 事

#### (1) 平成22年度社会教育・生涯学習振興の推進について

##### ①基本方針・重点施策について（井上利也課長より説明）

###### 【出川委員】

今年度は、青年の交流やかかわりに重点をおいた施策と考えてよいか。

###### 【井上課長】

青年の交流だけではなく、ただ今御説明申し上げた重点に沿って、それぞれの事業を実施してまいりたい。

##### ②主要事業の内容について（東海林宏補佐より説明）

###### 【出川委員】

これまで、この会議の中でも社会教育における成人教育の重要性が話題になってきたが、青年交流事業は、これからの山形の地域づくりや次世代の担い手育成等のために非常に重要な事業と思う。仕事をもつ青年を主役にすることや、地域が広がりを見せている中においてかつての枠組みでの支援が難しいなど、いろいろと困難な点はあると思うが、かつての山形の青年団の活動から学びながら、新しい形での事業をつくっていただきたい。その可能性を感じる事業である。

そこで、青年交流事業の活動の具体的な中身や事業の枠組みについて知りたい。具体的にどんな地域に根ざした活動を、どのように県全体に広げていくのか。事業のイメージを教えて欲しい。

###### 【井上課長】

現在、山形青年交流事業では、各地で活動している様々な特色ある青年サークルの活動状況を捉えながら、それらの団体に働きかけ、各団体の代表等で構成する14名の青年会議を組織したところである。さらに、青年会議のメンバーを中心に、県内の広い地域から約40名の企画運営委員会のメンバーを集め、青年自身が自発的に交流会等の事業を企画・運営できるように進めていく。交流会を単に楽しむだけの事業には終わらせず、その企画・実施を通して、山形の未来や地域づくりに対する若者の視点を拾い上げ、23年度以降の活動に生かしていきたい。今後、村山地域1箇所での交流会から、県内各地での活動への広がりも期待している。

###### 【岩沢委員】

家庭教育に関する電話相談では、子育ての悩みに答えていただいておりますが、それも必要なことと思うが、悩んでいる人ばかりでなく楽しんで子育てをしている人もたくさんいる。そのような方の例を伝えるなど、子育てを楽しくする視点での相談コーナーがあればと思う。

また、だがしや楽校普及事業についてお聞きしたい。放課後子ども教室を実施している中で、プログラムの一つとしてだがしや楽校的な体験活動を取り入れてみたいと考えているが、だがしや楽校普及事業はどのような事業なのか。

###### 【井上課長】

電話相談では、行政の支援として、困っている人への対応を優先して実施しているが、子育て

を楽しんでいくという視点から、広報等の中で御提案いただいたような情報の提供も大切であると感じた。

だがしや楽校普及事業については、国の予算による雇用対策事業として実施しており、鶴岡市のNPO団体に雇用された2名から、県内全域で普及活動に取り組んでいただいている。だがしや楽校のコンセプトや良さを、さらに広めていきたいと考えている。

#### 【金澤委員】

市町村職員の社会教育主事講習への参加は大変うれしい情報だが、どちらの市町村か。

#### 【時田専門員】

山辺町、中山町、大江町、東根市、金山町、米沢市、遊佐町の7市町である。

#### 【金澤委員】

資料を見ると市町村職員は対象者に含まれていないようなので、派遣費用を負担しない場合でも加えていただいてはどうか。

#### 【田宮委員】

若者と子どもとの交流が少ないと感じている。昨年かかわった青年交流活動やこれまでのサークルの活動を通して、山形の青年はそれぞれ点で活動していて線でつながっていないと思ったが、若者同士だけでなく、子どもとの接点はさらに少ない。そのため、見本となる大人としての姿を子どもたちに見せられていないと思う。

青年と地域とのかかわりについては、遠くにいる青年たちともつながりながら、お互いを意識してそれぞれの地域での活動をしていくというのが、今後の新たな目標にしたいと思っている。

また、山形ではYYボランティアサークルのほか様々なサークルや個人が活動をしており、行政が把握しきれていないネットワークがある。そういうネットワークとうまくつながれば、また面白いものが生まれるような気がする。若者や子どもたちが、堅苦しくない形でもっと参加しやすいネットワークをつくっていききたい。

#### 【井上課長】

青年と子どもたちとの交流については、YYボランティアや少年自然の家のサポーター等で、学生の方からかかわっていただいているが、学校支援ボランティア等の青年層は少ない状況である。子どもたちの体験活動に関してコーディネーターやアドバイザーとしてかかわっていただけると、一層活気ある事業になるのではないかと思う。また、機会があれば、青年交流事業でも青年たちに問いかけをしてみたい。

#### 【加藤委員】

里仁館で実施している幼児共育の「親と子のサタデースクール」事業では、地域の方のほか大学の学生などもボランティアとして参加して下さっている。初めは子どもと全然かかわりがなかった若い人でも、18回の事業が終わるころには、子どもに愛着を感じるようになっていた。大上段からこうしてやるという意識ではなく、いっしょに遊んだりする自然なかかわりを通して、子どもを見る目がどんどん育ち、将来の良い親を育てているような気がした。このようにいろいろな人の力を引っ張り込んで、事業に生かしていけたらと思う。大学の先生のゼミとつながったことで、大学生との接点をつくることができた。

また、かつて私も青年活動を行っていたが、話合いをして提案したことが具体的に実現されると、非常にうれしいものである。情報を吸上げるだけでなく、提案を目に見える形で具現化すれば、青年たちの活動意欲はますます高まって活性化するのではないか。

**【舩田委員（座長）】**

山形ふるさと塾推進事業にかかわって、小中学校の状況についてお聞きしたい。学校における活動として、総合的な学習の時間での郷土学習や地域学習、クラブ活動での伝承活動が期待されているが、現実には、教科の指導内容が増え、学校行事の厳選や総合の時間がカットされる動きとなっている。また、総合的な学習の充実度は、教師の取組む姿勢によって大きく左右されるという実態もある。小中学校の現場では、どのような難しさがあるかお聞かせいただきたい。

**【片桐委員】**

総合的な学習の原点としてこのような活動は深まっていると思うが、総合の時数は比較的多いため、行事関連の活動を総合に含めている実態もある。

問題は、子どもたちに段取りよく効果的に活動させるために、教師自身が勉強していかにか本気になって取組むかということである。本校は来年30周年記念として資料館のリニューアルに取り組みたいと考えているが、先生方が「郷土を愛する」というテーマになかなかのってこなかった。校長がいろいろと調べて提示したところ、ようやく興味がわいてきたようである。誰かが教師や子どもたちに提示しなければ、学校に居ながらにして宝物は発掘されないと感じている。

**【舩田委員（座長）】**

教師が本格的に勉強して取り組めば、これほど子どもたちに力をつける時間はないと思う。ぜひ推進していただきたい。

**【原田委員】**

中学校の場合、総合的な学習の時間は、全部ではないが多くの学校で体験学習的な職場体験活動等のキャリア教育に使われているのが実態だと思う。中には、学校の特色を総合の学習で出そうとしていると取組んでいる学校もある。しかし、総合の時数も少なくなってきたので、絞込みを行っている状況にある。

**【舩田委員（座長）】**

片桐委員・原田委員の話を伺い、学校における総合やクラブ活動の取組みをふるさと塾フェスティバルや地域文化の保存や伝承につなげていくのは、厳しい状況にあるのではないかと考えている。

**【出川委員】**

家庭、幼稚園・保育所等、地域の三者が連携する幼児共育の趣旨からすれば、新規事業である「ふれあい活動プログラム開発」の開発チームには、地元住民やNPO等を追記して取り組むべきではないか。

**【野口委員】**

これまで、家庭教育支援の現場に出向くことも多かったが、その中で課題と感じていたのが、子育て支援の現場では、親を支援される側に固定してしまいがちということである。

幼児共育の「ふれあい活動プログラム開発」では、保育現場でも生かせるプログラムの開発を期待している。

**【舩田委員（座長）】**

本日いただいたご意見を、県教委としてストレートにかかわることができるものと、教育事務所を通して市町村に働きかけるべきものに仕分けをして進めていただきたい。

また、大人の社会力については、私自身こだわって昨年度の特別委員会の報告にも大人自身の社会力をどうつけるかということ盛り込んでいる。県としても、子どもだけでなく大人の社会力をどうしていくのかという点を、今後十分検討していただきたい。

### 【半田委員】

課名について一言申し上げる。「教育やまがた振興課」は市町村から不評だったが、今回の「生涯学習振興課」については、シンプルに「生涯学習課」でよいのではないかと。それよりも、なぜ「社会教育課」という名称をなくしてしまったのか。社会教育に代わって生涯学習が出てきたわけではない。生涯学習の根幹を成すものが社会教育である。市町村では、地域課題や生活課題を抱えて生活している。学習を通してその課題を解決していく活動が、社会教育である。この際、社会教育の言葉の意味と中身を吟味していただきたい。地域の生活課題に迫り、地域のリーダーであり家庭の大黒柱である成人にスポットを当てなければ、社会教育の振興はありえないと思う。

## (2) 平成22年度社会教育関係団体補助金について（井上利也課長より説明）

### 【委員一同】

異議なし。

### 【小野委員】

補助金の交付は、今後も継続をお願いしたい。各PTA連合会からも、県からの補助金を持つ意味が大きいと、金額の多寡に関わらず無くさないでいただきたいという要望があった。

## (3) 特別委員会について（井上利也課長より説明）

### 【井上課長】

これまでは、概ね2年ごとに調査研究・報告を行っている。

22年度は5教振の見直しを行うため、今の段階で特別委員会を設置することはないが、今後、その作業に関連して、社会教育・生涯学習について検討の必要がある場合、年度途中でも設置することを御了解いただきたい。

### 【委員一同】

異議なし。

## (4) その他

### ① 県社会教育連絡協議会の役員（県理事2名の選出）について

- ・山形県社会教育連絡協議会について（井上利也課長より説明）
- ・各委員からの了承のもと、舛田委員、半田委員を理事に選出。

### 【桑嶋委員】

社会教育では、地域・学校・家庭の連携が重視されているが、地域活動を一生懸命やっている方でも、職場や働いている学校では地域に関与しないなど、一つ一つを別々に考えている方が多い。連携は言葉だけでなく、家庭でも地域でも実践していくことが大切なのではないか。自治体の職員の方には、地域の活動にも非常に熱心に参画している方と、家庭は家庭、地域は地域、職場は職場と考えて、地域の会合に全く出てこない方がいる。住民にとって一番身近な市町村職員が地域で一生懸命取り組んでいるケースでは、いろいろな事業が成功している。公務員の方には、地域でも先頭に立ってリーダーシップを発揮していただきたい。

また、今、大学は学生も教員も様々な地域に入って活動をしている。大学といっしょになって協働することにより、お互いに刺激を受けることができる。まだ取組みが進んでいない大学は、一步踏み出すことが予想以上に自分たちの活動を広げるといった経験がないのだと思う。もう一步を後押しできるように、私たち社会教育委員も努めていきたい。